



# 書評エッセイ「気になる一冊」 『リア王』はいくつあるのか : Sir Brian Vickers, The One King Lear (Harvard UP, 2016)

著者	森井 祐介
雑誌名	英米文学
巻	62
ページ	57-73
発行年	2018-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027182">http://hdl.handle.net/10236/00027182</a>

《気になる一冊》

## 『リア王』はいくつあるのか

—Sir Brian Vickers, *The One King Lear*  
(Harvard UP, 2016)

森 井 祐 介

『リア王 (*King Lear*)』は他のシェイクスピア作品同様、いやそれ以上に、校訂上難しい問題を抱えている。1608年の **First Quarto** (以後 **Q**) と 1623年の **First Folio** (以後 **F**) では、大きな異同が見られるためだ。具体的には、**F** にあって **Q** にはない箇所が約 100 行、一方、**Q** にはあって、**F** にはない箇所が約 300 行存在する。そのため、1723年のアレグザンダー・ポープ (*Alexander Pope*) 版以降、お互いにない箇所を補っていわゆる「折衷版」を作るというのが伝統的な編纂方法だった。ところが、*The Division of the Kingdoms* (1983) の出版を機に風向きが変わる。ゲイリー・テイラー (*Gary Taylor*) とマイケル・ウォレン (*Michael Warren*) が編集したこの論集は、それまでの編纂方針に異議を唱え、**Q** と **F** を、別の作品として扱うべきだと主張したのである。**F** にのみある約 100 行は、後になってシェイクスピア自身によって書き加えられたものであり、逆に **Q** にしかない約 300 行は、作者の手で削除されたものだからというのがその理由である。**QF** 折衷版はシェイクスピアの台詞をできるだけ取りこぼさず一つのテキストの中に収めることを目的としていたが、この編纂方法の弱点は、シェイクスピア時代には存在しなかった「合成本文」を、あたかも上演や出版の過程で「劣化」する以前の「オリジナル」として扱ってしまうことにあった。テイラーらの論文は、それまで慣習化されていた合成版の理論的根拠の薄弱さを露呈させ、『リア王』の編纂方針を大きく転換させる契機となったのである (金子 371)。この「二つの『リア王』」説は、テイラーとスタンリー・ウェルズ (*Stanley Wells*) が編集主幹を務めたオックスフォー

ド版の全集 (*William Shakespeare: The Complete Works*, 1986) において実際にテキストとして結実することになる。

*The One King Lear* は、タイトルが明示する通り、この「二つの『リア王』」説に真っ向から異を唱える。著者ブライアン・ヴィカーズ (Brian Vickers) によれば、『リア王』に関する限りシェイクスピア自身による改作などあり得ない。F にのみ存在する約 100 行 (ヴィカーズの計算で 102 行) は、後年の加筆ではなく、紙が不足していた Q の印刷業者が削除したものであり、Q にはあるが F にはない約 300 行 (ヴィカーズの計算で 285 行) は、国王一座 (King's Men) の bookkeeper が削除したものだという。ゆえに Q と F を従来通り合成することで、『リア王』という劇が持っていた “original unity” を、さらには “self-identity” を回復すべきだというのがヴィカーズの論旨である (328)。

結論から先に述べると、部分的には本書の解釈に賛同するにしても、シェイクスピアの原稿や promptbook が残されていない以上、こうしたテキスト間の異同に関して断定的なことは何も言えず、あくまでも解釈者の主観に頼らざるを得ないと感じた。ヴィカーズは確信に満ちた文体で、Q にない部分はすべて印刷業者による見落とししか意図的な削除によるもので、逆に F における大幅なカットは、国王一座の bookkeeper によるものと断言しているのだが、その論拠のほとんどは、削除箇所の「文学的価値」に依拠した「審美的」なものでしかない。以下、特に重要なチャプターの要点を紹介しながら、ヴィカーズの議論の骨子を追っていきたい。

本書は、Q を扱った “Part 1”, F を扱った “Part 2”, 「二つの『リア王』」説の概観とそれに対する反論が収められた “Part 3” の三部構成となっている。個人的に最も興味深かったのは、植字工が用いた紙面節約の技法を詳細に例示することで、Q の印刷に際して十分な紙数がなかったことを実証した (と思われる) “Part 1” の “Chapter 3: Nicholas Okes Compresses the Play” である。Q を請け負ったニコラス・オークス (Nicholas Okes) にとって、芝居本の印刷は『リア王』が初めてであった。その未經

験ゆえに、印刷に必要な紙の枚数を少なく見積もりすぎたとヴィカーズは仮定する (73)。これは 1619 年に出た **Second Quarto** (以下 **Q2**) と比べるとより明確になるという。**Q** を元に組まれた **Q2** が、85 頁を使って印刷しているのに対して、**Q** では 79 頁しか本文の印刷に使えていない (116)。そのため、オークスの元で働いていた植字工たちは、様々な紙面節約のテクニックを用いて、1 枚の紙にできるだけ多くの文字を詰め込む必要があったという。具体的にどのような「技法」を使ったかは 77 頁以降で詳述されている。主なものとしては、“n” や “m” の代わりに、“tilde” と呼ばれる音声記号 (˜) を母音の上に付けて 1 文字省略する (“grayhound” の代わりに “grayhoūd” (G4r30; 3.6.68 qtd. in Vickers 79)), “and” を “amper-sand” という記号 (&) で代用する (“Blow wind & cracke your cheekes” (F4r3; 3.2.1 qtd. in Vickers 81)), 「コンマの後のスペース (medial spacing)」(83) を削る (“Nor raine,wind,thunder,fire,are my daughters” (F4r17; 3.2.15 qtd. in Vickers 85)), 省略形を用いる (“My Lord” の代わりに “My L.” (B3v8; 1.1.189 qtd. in Vickers 79)) など多彩である<sup>1</sup>。これら、その場しのぎのテクニックではわずか 1 文字か、せいぜい数文字しか減らせないようにも見えるが、1 文字減らせば行末のスペースに単語を一つ挿入できる場合もあり、決して無意味ではない。また、行末の語がどうしても収まらなければ、植字工たちは前行または次行の空白部にその語を無理やり押し込む “turn-over” (82) と呼ばれる技に頼る。例えば通常、

Loue is not loue when it is mingled with respects that stands  
Aloofe from the intire point. Will you haue her?

とするとところを、紙幅の関係で 1 行目末尾の “stands” が入らない場合、次の行末の空白部分に括弧付きで詰め込み、

Loue is not loue when it is mingled with respects that  
Aloofe from the intire point wil you haue her? (stāds

(B4r22-23 ; 1.1.239-40 qtd. in Vickers 82)

のように割付けるのである。<sup>2</sup>より大胆なものとして、以下の様に複数の人物の台詞を 1 行に押し込んでしまう “continuous printing” (95) という手法も頻出する。

*Edg.* I would not take this from report, it is , and my heart  
breakes at it. *Lear.* Read. *Glost.* What! with the case of eyes  
(I4r11-12 ; 4.6.141-44 qtd. in Vickers 95)

その他、より大幅に紙面を節約するために *verse* を *prose* の形で印刷したり、*verse* の形は保ちつつも、3 行を 2 行に圧縮したりといった方法もしばしば採用されている。ヴィカーズは Q の組版に際して植字工たちが用いたこうしたテクニックを、76 頁から 114 頁に至るまで非常に詳細に紹介している。こうした職人たちの「苦労」の甲斐があつてか、Q 版の『リア王』における 1 頁あたりの単語数は他作品と比べてかなり多くなっているという。<sup>3</sup>本章は、テキストの物理的な側面を元に、Q の印刷に際して、紙が不足していたことを、丹念に論証しており非常に読み応えがある。<sup>4</sup>

しかし、この章はあくまでも前置きである。スペース節約の実例を数十頁に亘って列挙したのは、Q における紙不足がもたらしたより重大な「被害」を示すためなのだ。次の “Chapter 4: Nicholas Okes Abridges It” では、Q ではなく F にのみ存在する約 100 行は、後年、シェイクスピアが改作の際に「加筆」したわけではなく、スペースを節約するため、Q 印刷時にオークスによって「削除」されていたのだとの主張が展開される。ヴィカーズによれば印刷時の削除にはある一定の傾向が見られるという。そのひとつが、“when in doubt, leave out” すなわち「分からなければ、省け」の原則である (134)。「哀れなトム (Poor Tom)」に扮したエドガー (Edgar) や、錯乱状態にあるリア (Lear) は、時おり意味不明な言葉を口にするが、こうした理解不能な台詞はこの原則に基づいて Q では削除される傾向にあ

ったというのである。ヴィカーズは次のように要約する。

To argue that the Folio represents additions . . . would mean that what I have described as cuts in the mad speech of Lear, or in the assumed idiolect of Poor Tom, were later additions. But in a text already overlong and verbally dense, why would anyone wish to add such puzzling utterances as “Humh” ; “O do, de, do, de, do de” ; “Sayes suum, mun” ; “Sesey” ; and “Sa, sa, sa, sa”? (136, *italics original*)

確かに、こうした意味不明な間投詞を後から付け加えるというのは考えがたいことのように思われる。しかし、Q や F の原典を確認すると、かならずしもこの主張を鵜呑みにできないことに気付く。確かに、トムの “Humh” や、 “O do,de,do,de,do de” (3.4.47, 58-59 ; TLN 1828, 1839 qtd. in Vickers 134), リアの “Sa, sa,sa,sa” (4.6.203 ; TLN 2645 qtd. in Vickers 135) などは F だけにあって、Q にはない台詞である。しかし、ヴィカーズが引用していない他の箇所では、例えば F の “Do,de,de,de : sese” (3.6.74 ; TLN 2031) が、Q では “loudla doodla” (G4r33) となっている。つまり異なる間投詞が対応しているのである。他にも、F にのみ見られる意味不明語として、ヴィカーズは “Sayes suum, mun” (3.4.99 ; TLN 1879 qtd. in Vickers 134) を挙げているが (F の原典では引用箇所の後に “,nonny” が続く)、これも Q を確認すると “hay no on ny” (G2r33) と、一部が別の間投詞に置き換わっているだけである。F の “Sesey” (3.4.100 ; TLN 1880 qtd. in Vickers 134, *italics original*) に至っては、ほぼ同語の形で Q の “caese” (G2r33) が対応している。果たしてこれらの理解不能な言葉が本当に削除される傾向にあったかどうかは、Q と F を徹底して比較しない限り断定できないだろう。

また、他に削除対象となった箇所として、ヴィカーズは、「繰り返しの台詞 (verbal repetition)」を挙げている (136)。確かに引用されている例に

は、シェイクスピアが後からわざわざ書き加えたとは考え難い単なる繰り返しも多い。しかし、後年の意図的な加筆と判断しても特に不自然ではない台詞も存在する。例えば、**Q** と **F** では大きく異なることが知られているリアの今際の際の言葉はどうだろう。**Q** では散文で

. . . O thou wilt  
come no more, neuer,neuer,neuer, pray you vndo this button,  
thanke you sir, O, o,o,o. (L4r17-19 qtd. in Vickers 162)

となっている。これが **F** では韻文となり

Thou'lt come no more,  
Neuer,neuer,neuer,neuer,neuer.  
Pray you vndo this Button. Thanke you Sir,  
Do you see this? Looke on her? Looke her lips,  
Looke there,looke there.  
(5.3.308-12 ; TLN 3279-83 qtd. in Vickers 162)

と変わっている。コーディリア (**Cordelia**) を想って死ぬのは **QF** と同じだが、**F** では“**neuer**”の数が増えているだけではなく、最後の2行にかなり意味のある台詞が加わっている。この両者の違いに関してヴィカーズは次のように言う。

. . . no one can seriously think that Shakespeare or anyone else would have added the two instances of “neuer” necessary to fill out what would otherwise have been a defective blank verse line, or would have added the characteristically emphatic four-fold repetition of “Looke.” These were always integral parts of Lear’s language, in Shakespeare’s text. (162)

確かに、シェイクスピアが Q の元となったバージョンを書いた数年後、あえて “*neuer*” を二つ付け足した可能性は低いかもしれない。また、この部分が Q では *prose* になっていること、あるいは、この最後の場面が、紙面目一杯に印刷されており、何とか 1 枚に収めようとした苦心の跡が読み取れることなどを考え併せると、F にのみ見られる 2 行、“*Looke on her? Looke her lips, / Looke there, looke there*” という、字面だけ見れば、“*Looke*” の繰り返しとも言える台詞が、紙面節約のために印刷段階で削除された可能性も皆無ではないだろう。一方で、この非常にインパクトの強い台詞が、後になって書き加えられた可能性を完全に否定することもできない。Q の段階では“O, o,o,o”と呻き声を上げるリアを、シェイクスピア自身が書き換え、コーディリアの唇を見ながら息絶える一層複雑な場面にした可能性も大いにあるように思われる。いや、むしろ魅力的な可能性だと言ってもいい。重要なのはある台詞が「繰り返し」かどうかではなく、その「繰り返し」によって生じる効果ではないだろうか。

そもそもこの章の問題は、たとえ Q 印刷時の紙不足が事実であったとしても、そのことが印刷業者による削除の直接的な証拠にはならない点にある。ヴィカーズは Q にない台詞が、印刷業者によって削除されたものだと仮定した上で、次にその削除の「理由」を推測している。つまり、推論の上に推論を重ねているわけで、興味深くはあっても脆弱な議論だと言わざるを得ない。もちろん、F にのみある台詞が、シェイクスピアによって「加筆」されたと証明することもできないが、印刷業者によって「削除」されたと断言する根拠もまた乏しい。加えて Q と F の間に散見される細部の異同は、単なる印刷時の削除では説明のつかないものも多く、これらは誰の手によるものであれ何らかの書き換えの結果生じたとししか考えられないのである<sup>5</sup> (Syme)。

同様のことは、F を論じた“Part 2”以降のチャプターにも当てはまる。シェイクスピア自身による修正説を否定する上で、本書の要だと思われる“Chapter 7: The King's Men Abridge a Tragedy”に絞って話を進める。



この章では、Q にはあって F には含まれない約 300 行に関して、シェイクスピアが後年の推敲の結果削除したのではなく、往々にして細やかな作劇術に注意を払わない劇団によって省かれたことを、ヴィカーズは劇構造の観点から論証しようとする。F の欠落箇所として最も有名なのは、錯乱したリアが椅子をゴネリル（Goneril）とリーガン（Regan）に見立て、妄想に基づく「裁判」を行う、いわゆる “mock-trial” だろう。Q のこの「裁判」を大幅にカットしたのが、以下に引用した F の一節である。

*Lear.* To haue a thousand with red burning spits

Come hissing in vpon 'em.

*Edg.* Blesse thy fiue wits.

*Kent.* O pittie: Sir, where is the patience now

That you so oft haue boasted to retaine?

*Edg.* My teares begin to take his part so much,

They marre my counterfetting.

(3.6.15-16, 57-61; TLN 2013-19 qtd. in Vickers 251)

Q ではリアの 2 行の台詞の後で約 40 行にわたって「裁判」が続くのだが、F ではその場面が大きく抜け落ちている。この削除に関してヴィカーズは次のように述べる。

The compassionate reactions of Edgar and Kent read strangely given the discrepancy between their intense sympathy and what Lear has— or rather, has not said. The bystanders' reactions seem “in excess of the facts,” in no proportion to Lear's single utterance. The cut, whereby compassion exists without suffering, leaves a hole in this scene. (251)

登場人物の心理と反応に注目したこの解釈には説得力がある。妄想に基づく

「裁判」の場面がないと、錯乱したリアの言動を大いに嘆くケント（Kent）とエドガーの様子が、やや大げさに見えてしまうのだ。引用箇所のしばらく後で、リアは “Then let them Anatomize Regan” (3.6.76; TLN 2033 qtd. in Vickers 252, *italics original*) と唐突に言うのだが、ゴネリルに対する尋問の場面がないと、“then” という台詞は意味を成さない (252)。非常に強烈なインパクトを与える裁判場面を、わずか数十行後にはこうした矛盾が起こるような形で、作者自身が削除したとは考えがたい。また、*Division* の中でテイラーらシェイクスピア改作派の論客たちが強弁するように、この “mock-trial” を削除したほうが演劇として効果的だ（作者自身が劇を「改善」した）という主張も、ヴィカーズが言うように賛同しがたい。<sup>6</sup>

それでは、F における欠落部は、すべて劇場関係者による削除の結果だと断言できるのかというと、それも疑問である。F における削除箇所に関してヴィカーズは次のように要約する。

. . . his [theater abridger's] severe abridgements of Lear's demoted “arraignment”; his omission of the servants' tending blinded Gloucester; of Albany's denunciation of Goneril and Regan's inhuman behavior; and . . . the complete loss of 4.3, depicting Cordelia's grief for her father's sufferings and Lear's remorse at having disowned her . . . leave major gaps in the play's moral and emotional structure. (256)

コーンウォール（Cornwall）とリーガンがグロースター（Gloucester）の目を潰した後で、舞台上に残った二人の召使いが「何と酷いことを」と嘆く場面や、オルバニー（Albany）がゴネリルたちの邪悪さを叱責する台詞、あるいは、父親の境遇を憐れむコーディリアの様子を伝える台詞などは、善悪の対立の中で浮き彫りになる劇全体の倫理的構造を支える上で重要なのは確かだ。しかし、“At no point can Shakespeare be considered as the agent who destroyed his own design” (266) とまで言い切る根拠は存在

しない。たとえ、作者が考え抜いた末に書いた台詞でも、後で何らかの内的・外的要因によって削除する可能性を完全に否定できるだろうか。また、ある場面や台詞を読者あるいは観客が「優れている」「重要だ」と感じたからといって、作者が必ずしも「常に」同じように判断するとは限らないのではないか。ヴィカーズはシェイクスピアが「自らの意図 (*his own design*)」を台無しにするような修正を加えたとは考えられないというのだが、シェイクスピア自身の“*design*”が何であったかを推し量るのも難しければ、その“*design*”が年月を経ても不変のものだったかどうか知る術もないのである。ヴィカーズは書誌学に文学的観点を持ち込んではいけないというフレッドソン・パウアーズ (*Fredson Bowers*) の指針に基づいてテイラーを批判するのだが (301)、劇の“*moral and emotional structure*”を根拠に **F** におけるシェイクスピア自身の介入を否定する姿勢もまた、極めて文学的な批評態度ではないだろうか。そもそも **Q** と **F** の異同に関して、ヴィカーズあるいは逆にテイラーたちの主張は、純粋に書誌学的な観点から論じることなど不可能なのである (*Syme*)。

たとえ、「シェイクスピア特有の台詞 (*Shakespearean line*)」を見分けることができて、「シェイクスピア特有の削除 (*Shakespearean cut*)」を見抜くことなどできない、というリチャード・ノールズ (*Richard Knowles*) の言葉を引用して (*qtd. in Vickers 272*)、ヴィカーズはテイラー一派のシェイクスピアによる削除説を批判するわけだが、この批判はまたヴィカーズ自身にも当てはまる。**F** にはない台詞が、「シェイクスピアによる削除」だと言い切れないのと同様、「*bookkeeper* による削除」だとも言い切れないからだ。

続く“**Part 3**”では、「二つの『リア王』」説に対する総括的な反論とともに、“**Part 2**”同様の主張が繰り返されているが、**F** におけるシェイクスピアの関与を否定できているとは思えない。ただし、論敵に対して極めて過激な言葉が飛び出すという点で、この“**Part 3**”は異彩を放っている。特に310頁から始まる“**Conclusion**”は、それまでの「まとめ」というよりも、ほとんどが「二つの『リア王』」説を採る研究者、特にテイラーに対する猛

烈な攻撃に費やされている。「二つの『リア王』」説の論客を「学者ではなく  
法廷弁護士 (courtroom advocates rather than scholars)」だと切り捨て  
(285), テイラーの『リア王』に関する「無理解」に対して, 「他の職業に  
鞍替えすべきだ (should seek some other occupation)」とまで言い切るヴ  
ィカーズの言葉には激しい怒りが感じられるが (275), これは単に『リア  
王』の解釈や編纂方針を巡る見解の相違から来るものではなさそうだ。「革  
命分子 (revolutionaries)」を標榜し, オックスフォード版全集の出版にあ  
たって権威ある大学出版局の「乗っ取り (hijacking)」に成功したとす  
べくテイラーの露悪的な態度 (qtd. in Vickers 319-20), 延いてはその文学研  
究者としての基本的あり方に対して, ヴィカーズは激しく反発しているの  
である。

以上, **Q** および **F** の欠落部分を論じたチャプターを中心に, 本書の内容  
をかいつまんで紹介した。繰り返しになるが, 物理的証拠が残されていない  
以上, **F** におけるシェイクスピアの介入が「全く」なかったことを証明する  
のは困難だと言わざるを得ない。

それでは, やはり, **Q** と **F** を組み合わせて, いわゆる折衷版を作るのは  
間違いで, 常に別々の作品として扱う必要があるのだろうか。こうした合成  
本文の書誌学的な妥当性について, 評者には判断する資格がないのだが, ヴ  
ィカーズの次のコメントは示唆的ではないだろうか。

MacDonald Jackson, a member of the Two Versions group, men-  
tioned in passing that there are “2,825 lines of *Lear* common to **Q**  
and **F**.” It is difficult to see how two versions of a text sharing 90  
percent of the same lines could be described as “different.” (270-  
71)<sup>7</sup>

もちろん, たとえ「量的」には 90 パーセントの台詞を共有していても, 残  
り 10 パーセントの「質的」な相違の大きさゆえに, **Q** と **F** を「別物」と

みなし得るという考えもあるだろう。ただし、ヴィカーズは次のようにも述べている。

The previous consensus of scholarly judgment on *King Lear* was that two texts were interdependent, in that each contained passages omitted by the other, and that this complementarity meant that a combination of the two would restore their original unity. (310)<sup>8</sup>

Fの元になった promptbook に関して、シェイクスピアが手を加えたか、少なくとも手を加える許可を与えた可能性がある以上、ヴィカーズの言う“original unity”というのは想像の産物に過ぎないかもしれない。しかし、Fが出版されるまでのプロセスにおいて、誰が、いつ、どのような形で変更を加えたか確証がないままでは、F（のすべて）をシェイクスピアによる改訂版と断定することもできない。<sup>9</sup>

FもそしてQも、シェイクスピアの原稿そのものではなく、また上演用台本そのものでもなく、そうした一種の“original”に何らかの手が加わって出来上がった一つの“edition”だと言うことができる。手を加えたのは著者自身かもしれないし、ヴィカーズが主張するように印刷所や劇団であったかもしれない。

折衷版とは、シェイクスピアが書いた可能性のある台詞を全て組み合わせ「整合性」を持たせた、新たな“edition”であると言えるが、こうして出来上がった“edition”は必ずしもFやQよりも劣位に置かれねばならないものだろうか。<sup>10</sup> 本文を合成するという行為は校訂者による一種の「解釈」である以上、作品と読者との間の障壁にも成り得るが（Elden）、同時に、本文研究者の知見が優れた「解釈」を提示する余地も否定できないのではないか。グリーンプラット（Stephen Greenblatt）が編集主幹を務めたノートン版の全集（*The Norton Shakespeare*, 1997）のように、QとFを見開きで印刷し、従来の折衷版も収録するというスタイルが、様々な“editions”を自ら確かめたいという読者にとって最も望ましいのかもしれない。

本書を通読して本文決定の困難さを僅かながらも垣間見た一門外漢の素朴な感想である。

なお、ヴィカーズ同様、Fにおけるシェイクスピア改作説に否定的なエリック・ラスムッセン (Eric Rasmussen) ですら指摘しているように、本書には本文批評に踏み込んだ研究書としては致命的と思われるほど、誤植、引用の誤記、引証方法の不統一など校正面での不備が顕著である (Rasmussen 247-48; Greenblatt 36; De Grazia 26)。同じ台詞を頁をまたいで論じている際の引用語句の異同や議論の矛盾も気になった。こうした不備は、“Appendix 1”のQのファクシミリ写真に付された行番号や解説、および、Qで用いられた紙面節約技法の数値データが一覧化された“Appendix 2”にも及んでいる。些末な点を挙げればきりが無いが、特に序文の以下の一節は重大である。

... the Quarto lacks 102 lines (also many smaller phrases and single words) *not* found in the Folio, whereas the Folio lacks 285 lines (and some phrases and words) *not* found in the Quarto (ix, italics mine).

本書の要となる重要事項のはずだが、強調した“*not*”を二箇所とも削除しないと意味が通じない。同様の誤りが以下の引用にも見られる。

... the printer omitted the 102 lines found in the Folio, while the theater company omitted the 285 lines found in the *Folio* (270, italics mine).

文末の“*Folio*”は明らかに“**Quarto**”の間違いである。再版時の修正が待たれる。

本稿は関西シェイクスピア研究会 2017 年 2 月例会（於関西学院大学梅田キャンパス）の発表原稿に加筆修正を施したものである。

# 注

<sup>1</sup> なお、Q (*True Chronicle Historie of the Life and Death of King Lear and His Three Daughters*) および F (*The Tragedie of King Lear*) からの引用は、*Internet Shakespeare Editions* の Facsimile 版 (Q は Halliwell-Phillipps (Perfect) 〈[http://internetshakespeare.uvic.ca/Library/facsimile/bookplay/BL\\_Q\\_1\\_Lr\\_2/lr/](http://internetshakespeare.uvic.ca/Library/facsimile/bookplay/BL_Q_1_Lr_2/lr/)〉, F は Brandeis University 〈[http://internetshakespeare.uvic.ca/Library/facsimile/bookplay/Bran\\_F\\_1/lr/](http://internetshakespeare.uvic.ca/Library/facsimile/bookplay/Bran_F_1/lr/)〉) を参照し、*The One King Lear* における引用ページを併記した。*The One King Lear* の引用と相違がある場合、古版本の表記を優先した。これらの引用はパンクチュエーションを含め、基本的にオリジナルのレイアウトを再現している。出典の示し方はヴィカーズに従い、Q の引用は折記号 (signature) とその頁における行番号、(対応箇所がある場合は) リヴァーサイド版 (*The Riverside Shakespeare*, 2nd ed., 1997) 所収のテキスト (G. Blakemore Evans, ed.) の幕、場、行番号を、F の引用はリヴァーサイド版の情報と通し行番号 (TLN) を示してある。TLN は *Internet Shakespeare Editions* で公開されている F の “Old-spelling transcription” (Michael Best, ed.) に付された番号を参照した。なお、ヴィカーズがリヴァーサイド版の対応箇所を明記していない場合、評者が付け加えた。

<sup>2</sup> ここでは余程スペースが足りなかったようで 2 行目の “point” と “wil” の間のポリオドは省略され、“stands” の “n” は tilde に置き換えられている。

<sup>3</sup> 116 頁の表 E 欄参照。比較されている他テキストのサンプル数が少なすぎるため、「紙面節約説」がより説得力を持つためには、他作家の作品を含めたより包括的な検証が必要ではあるが (Syeme), ほぼ同じ台詞を印刷した Q 2 との比較において、1 頁あたりの語数が明らかに多くなっているという事実は、紙不足を示唆する一定の根拠となり得るだろう。

<sup>4</sup> 紙不足説に対しては反論もなされている (Greenblatt 35; Rasmussen 247; Syeme)。

<sup>5</sup> その他、ヴィカーズは印刷時に削除の対象になった台詞として、“[u]nanchored [u]tterances” (143) を挙げている。これは、観客に向けた傍白や、他の登場人物が何の反応も示さない、あるいは問いかけに答ええないといった、いわば孤立した台詞を指す。他の登場人物が反応しない台詞ゆえに、なくても流れを壊すことがないから削除されたのだらうという推論であるが、逆に言えば、Q の段階では存在していなかったが、F ができる前に、流れを壊さない形で挿入された可能性も否定できない。

<sup>6</sup> この点を含め、F における改変に絶対的な優位を主張する立場の矛盾については、ヴィカーズも参照しているウィリアム・キャロル (William C. Carroll) が極

めてバランスの取れた効果的な議論を行っている（230-43）。ただし、キャロルはFにおける「改変」がすべてシェイクスピアによる「改善」であるという一種の“Bar-dolatry”を批判しているだけであって、シェイクスピア改作説自体は積極的に肯定している（243-44）。

<sup>7</sup> アーデン版第3シリーズの編者フォークス（R. A. Foakes）もこれに近い見解を示している（118-19）。

<sup>8</sup> ヴィカーズが援用するワイス（René Weis）も同様に“unified text”の復刻を唱えている（47）。

<sup>9</sup> ホニグマン（E. A. J. Honigmann）もキャロル同様、Fにおける改変がすべてシェイクスピアによるものであるとか、Qよりも良くなっていると考えるのは無理があるにしても、プロットの流れを乱さない形で「繊細に（delicately）」なされた大幅な書き換えに関しては、作者自身によるものだと結論付けている（155）。一方、シドニー・トーマス（Sidney Thomas）は、Qに見られる明白な矛盾や不備がFでも残されていること、シェイクスピア自身の改訂を示唆する証拠が作品内にも作品外にも見られないことなどを理由に、作者自身の計画的な改作に否定的である（508, 510）。ノールズもFが後年の加筆修正版であると認めつつ、改変が極めて限局的であることなどを理由に、シェイクスピア自身の関与については懐疑的である（32, 45-46）。

<sup>10</sup> ただし、新オックスフォード版の全集（*The New Oxford Shakespeare*, 2016）に付された序文の“Textual Choices”に関する以下の一節は、いわゆる折衷版が必ずしも最大限にシェイクスピアの言葉を反映しない可能性を示唆しており興味深い。

... even the traditional conflated editions left out a lot of material that is probably Shakespearean, because whenever there were variants of wording in different early texts editors assumed that one wording was Shakespearean and the other ‘wrong’; in fact, if Shakespeare simply changed his mind, both readings would be Shakespearean and both would be correct. The traditional editorial confluents were confabulations, based on the assumption that Shakespeare never revised his own work. (Taylor and Bou-rus 51-52)

#### 参考文献

- Best, Michael, ed. *King Lear*. 1623. By William Shakespeare. *Internet Shakespeare Editions*. N. P., n. d. Web. 20 Nov. 2017.
- Carroll, William C. “New Plays vs. Old Readings: *The Division of the Kingdoms* and Folio Deletions in *King Lear*.” *Studies in Philology* 85.2 (1988): 225-44. Print.



- De Grazia, Margreta. "Who Is It That Can Tell Me Who I Am?: The Problematic Textual History of *King Lear*." Rev. of *The One King Lear*, by Sir Brian Vickers. *TLS* 3 Feb. 2017: 26. Print.
- Elden, Stuart. "One or Two *King Lear*s?" Rev. of *The One King Lear*, by Sir Brian Vickers. *Berfrois*. N. p., 2 Jan. 2017. Web. 6 Apr. 2017.
- Evans, G. Blakemore, gen. and textual ed. *The Riverside Shakespeare*. By William Shakespeare. 2nd ed. Boston: Houghton, 1997. Print.
- Foakes, R. A. Introduction. *King Lear*. By William Shakespeare. Ed. Foakes. London: Arden-Cengage, 1997. 1-151. Print.
- Greenblatt, Stephen. "Can We Ever Master *King Lear*?" Rev. of *The One King Lear*, by Sir Brian Vickers. *New York Review of Books* 23 Feb. 2017: 34-36. Print.
- Honigmann, E. A. J. "Shakespeare's Revised Plays: *King Lear* and *Othello*." *The Library* 6.4 (1982): 142-73. Print.
- Knowles, Richard. "Revision Awry in Folio *Lear* 3.1." *Shakespeare Quarterly* 46.1 (1995): 32-46. Print.
- Rasmussen, Eric. Rev. of *The One King Lear*, by Sir Brian Vickers. *Modern Philology* 114.4 (2017): E 245-48. *U of Chicago P Journals*. Web. 24 Apr. 2017.
- Shakespeare, William. *M. William Shakespeare: His True Chronicle Historie of the Life and Death of King Lear and His Three Daughters*. London, 1608. *Internet Shakespeare Editions*. Web. 20 Nov. 2017.
- . *The Tragedie of King Lear. Mr. William Shakespeares Comedies, Histories & Tragedies*. London, 1623. 283-309. *Internet Shakespeare Editions*. Web. 20 Nov. 2017.
- Syme, Holger S. "The Text Is Foolish: Brian Vickers's '*The One King Lear*.'" Rev. of *The One King Lear*, by Sir Brian Vickers. *Los Angeles Review of Books*. N. p., 6 Sep. 2016. Web. 22 Feb. 2017.
- Taylor, Gary, and Terri Bourus. "Why Read *This Complete Works*?" Introduction. *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works: Modern Critical Edition*. By William Shakespeare. Taylor et al., gen. eds. Oxford: Oxford UP, 2016. 45-58. Print.
- Thomas, Sidney. "Shakespeare's Supposed Revision of *King Lear*." *Shakespeare Quarterly* 35.4 (1984): 506-11. Print.
- Vickers, Brian. *The One King Lear*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2016. Print.
- Weis, René. Introduction. *King Lear: A Parallel Text Edition*. By William Shakespeare. Ed. Weis. 2nd ed. London: Longman-Pearson, 2010. 1-35.

Print.

金子雄司, 「シェイクスピア本文とは何か (6) ——*The Division of the Kingdoms* をめぐって (続)」『英語青年』147.6 (2001) : 369-71. Print.